

# 女性だって独立する時代 夢を実現させたいですね

今村 真理さん (25歳)

「ネイルケアは男性にも流行っています。これからは男性も指先を綺麗にする時代ですよ」  
白色で統一された明るい店内で、話し始めた今村さんは、浦和駅近くでネイルサロンを開業したばかり。

「普通に就職して、結婚して、家族のためにつくす。それだけで終わる人生は送りたいくない」という思いから独立を目指した今村さん。美術系の短期大学を卒業後、一度は一般企業に勤めましたが、やはりネイルリストになりたいという夢を捨てきれず、専門学校に通いました。都内で一流といわれるネイルサロンに二年間勤め、ネイルの奥深さにのめり込み、「いつか自分の店を持ちたい」という思いを抱き続けていたそうです。

最初は「もっと安定した仕事に就きなさい」と両親に猛反対されたそうですが、今村さんの熱意と、周囲のサポートもあり、両親を説得したそうです。創業



です。将来的には、ネイルだけじゃなく、いろいろなことに挑戦してみたい。彼と一緒に、リラクゼーションサロンもいいですね」  
自分の得た知識を最大限に生かしてお客様に提供するため、今村さんは夢に向かって挑戦し続けています。

結婚を問もなく控えた今村さんは、「物心両面で支え合っているパートナーは、一番の理解者。男性がこう、女性がこうなんて考えは彼にはありません。仕事も二人で、子育ても二人で・・・たぶんそうなると思います」と微笑みます。「仕事はとても楽しい。独立して良かった

## 子育てへの理解、お互いの気づかい

栗田 尚起さん (31歳) 奈津子さん (29歳)

「晴れやかな明るい子に育ってほしい」という気持ちを込めて名付けた千晴ちゃん、小晴ちゃんの二人の子どもをもつ栗田ご夫妻。お子さんへの思いがそのまま二人に当てはまるような、明るい雰囲気のご夫妻です。

「うちでは、家事は分業で、やれる方がやるようにしています。お互いを気づかうように心がけています」という尚起さん。奈津子さんが疲れているなど感じたときには、洗濯機を回しながら、料理もこなします。

仕事から帰ってきて子どもたちの笑顔を見ると、日々の仕事の疲れもいやされると尚起さんは笑顔で話します。  
二人目のお子さんを出産後、奈津子さんはこの四月に職場に復帰しました。「私の職場では、妊娠・出産後も職場復帰する人がほとんどですね。子どもが出来てからも奈津子さんが仕事を続けることは、二人にとって当然という感覚だったそうです。」



夫の尚起さんの会社も育児には理解があるそうで、子どもが病気のときなどに休むを取ることが全く問題ないそうです。しかし、育児休暇の取得はしませんでした。「男性職員が育児休暇をとっているという話はほとんど聞

いたことがありません」  
現在の状況では、制度そのものはあっても、実際に制度を活用するには勇気がいるようです。二人とも子どもとずっと一緒にいられない寂しさはありますが、昼は仕事に一生懸命取り組み、家に帰ったら子育てを頑張る、というようにメリハリのある生活ができています。しかし、一般的には栗田ご夫妻のように仕事と家庭を両立できているとは限りません。



実際、尚起さんの知人から子どもを預ける場所が見つからず、女性がやむを得ず仕事を辞め、家庭に入っているという話も聞くそうです。子どもを預けられる時

## 男女がともに豊かに・楽しく暮らすために 若者たちへのメッセージ

### 「ケータイの功罪」

ふかわりょう

僕たちにとって電話がそうであったように、若者の皆さんにとっては物心ついたときからすでにあったので想像できないかもしれませんが、かつて「ケータイのない社会」がありました。中学生の頃、好きな女の子に電話をするために、家だと家族に聞かれてしまうので、10円玉を握り締めて近くの公衆電話まで走ったものでした。その手にした10円玉は、すぐにテレホンカードになり、やがてポケベルに変わります。このポケベルによって恋愛のしかたが大きく変わったものの、このときは誰も、電話を携帯しようなんて思ってもいなかったし、望んでもいませんでした。そして僕が二十歳の頃、人々はポケベルを捨て、ケータイを手にするようになったのです。

その後、ケータイは飛ぶ鳥を落とす勢いで進化し、様々な機能を吸収していきます。カメラ、音楽、電子マネーなど、ケータイだけで色々なことができるようになり、気付けば人間は、それなしには生活できなくなってしまうかもしれません。どういことでしょうか。10円玉を握り締めていたとき、何ん自由なく生活していたのに、いまではそれがなく落ち着かなくなってしまうほどケータイに依存しているようです。おそらくこれからも、ケータイの吸収活動は続くことでしょう。ケータイがすべてをやってくれる時代の到来です。でも、ケータイに依存するのはいいけれど、あんまり依存しすぎてケータイに振り回されては、ケータイを携帯するのではなく、むしろ人がケータイに携帯されるようなものです。最後に吸収されるのは、人間なのかもしれませんね。

ふかわりょう/タレント。1974年生まれ。お笑い芸人としての活動の他、クラブDJ、エッセイスト、小説家としても幅広く活動中。エッセイ集「無駄な哲学」(ゴマブックス)、初小説「DSJ—消える街—」(宝島社)が発売中。

### 通信員レポート

私が学生のころには、考えられなかったことですが、現在の女性の社会進出はますます進んでおります。働きたいと思っている女性は「家にいてほしい」という男性を選びたくないのではないのでしょうか。若い男性を取り巻く状況が変わってきています。男性も結婚して子どもを持ちたければ、自分が家事をするのは当たり前だということ、意識を変えることが必要だと思います。女性だけではなく、男性と一緒に子育てをしましょう。

「男は仕事、女は家庭」という観念の縛りからなんと解放されたいともがいてきた私にとって、4人の方の考え方・生き方はまさに理想とするところです。大変頼もしく、力強く感じます。まだまだ現実には厳しい場面もあるので、男女共同参画を当たりまえとする若い世代を日々の暮らしの中で応援できたら良いと思います。さらに、自分自身の中に「女性だから、男性だから」という意識が依然あるのでは、と常に省みていきたいものです。

今回のインタビューにお答えくださった3組の方々には男女共同参画のお手本となるような考え方、生き方をなさっていて、すばらしい若者達だと思います。ただ「女のくせに、男のくせに、女だから、男だから、の考え方が存在し続けているのも事実です。しかし3組の方々のような若者が育ててくれる次世代は、男女の差別の無い適材適所自然体でその存在を共有し、人として生きていける社会が実現することでしょう。そうあって欲しいと願って止みません。

「男は仕事、女は家庭」という固定観念は、これから先無くなっていくと思います。今はまだ育児休暇をとる男性がほとんどいなかったり、子どもを預ける所がない場合、女性が仕事を辞めて家庭に入ることがほとんどなので、こういうことは早く変わっていくといいなと思います。今回私と近い歳にある方達の前向きな意見を聞いて、私もこのまま家事、育児のためだけに家の中でじっとなんてしてられないわ、と気がわいてきました。

◆通信員は公募により「You & Me ~夢~」の編集に関わっている市民です。